

拝啓

新著『戦争・核に抗った忘れぬ人たち』有難く拝読いたしました。先の『核』に立ち向かった人びと』および『核なき世界へ』と合わせて、日本反核人辞典の趣をもつもので、異議深い仕事と感服いたします。

たまたま大塚茂樹君の好著『心ざわぐ憲法9条』を読み終えたところでした、そのなかに参考文献の著者名に私の知る大阪朝日の永井靖二（現編集委員）の名を発見、彼をネットで検索すると貴共同・平和ジャーナリスト基金で貴君が彼の『司法と憲法9条』を推挙しているのを知りました。この人は私の『樺太よ遠く孤独な』及び『日露領土紛争の根源』を讀んでいて、かつてサハリンに取材に行く前に訪ねて来たものでして、その後もずっと付き合いです。一時は福井支局に勤務し、福井大で「もんじゅ」を批判的に研究していた山脇道夫（東大原子力工学科名誉教授）のインタビューを記事にしてみました。これはフクシマ後に方向転換して古川和男のトリウム熔融塩原子炉の支持者になった人です。

永井氏の親しい上司に論説委員になった加戸靖史という人がおりました、2014年7月に吉田嘉清氏宅にインタビューに来ておりました。（そのことは例の2015年発行の米寿記念文集に氏自身が書いております）。拙著『トリウム原子炉革命——古川和男・ヒロシマからの出発』の発売が8月6日でした、帯の裏側に吉田さんの推薦の辞をいただきました。これに対し直後に、「原発擁護か!」といった、かなり強い抗議があったようで「なんとかしてくれ」という困惑の電話がありました。その後8月16日の朝日に一、二面にわたる加戸氏の「非核 原爆も原発も」が掲載され、その中に山脇氏のトリウム熔融塩炉への傾倒が肯定的に紹介されていました。これを見て吉田さんは安堵したようでした。電話をしてきて贈呈分以外に数冊購入してくれました。貴君の永井書の推奨を見て思い出した次第です。

朝日も東京と大阪とでは違うようでした、東京は、先日の大きな社説に示されたように「再生可能エネルギー」支持に舵を切ったようです。「原発ゼロ」を目指そうということでしよう。しかし「原発ゼロ」が実現しても日本がすでに抱え込んでいる47トンものプルトニウムの始末はどうするのでしょうか。米国側からの要求でプルトニウムは削減・消滅しなければならぬわけですが、安倍政府にはその意思はなさそうです。核武装用に保持しておこうということ。プルトニウム処理の技術は古川和男が国際特許として残して残っているのですが、日本政府がこれを利用しない以上、「原発ゼロ」の勢力に期待しなければなりません。すなわちその勢力が「プルトニウム・ゼロ」の地点にまで進出してくれることが望まれます。それは反原発Ⅱ反核兵器の立場に進むことであり、トリウム熔融塩炉路線との提携の道が開けるからであります。

大分市で身近に幼馴染みの女友だち（後にわが妻）の被爆後の惨状を見ていたために、古川和男は原発を目指しつつ、当初からウラン（広島型）とプルトニウム（長崎型）を斥け、トリウムを選んで研究を始めました。先行者であり先達だった人に米オークリッジ研究所のワインバーグおり、操作に便利な媒体に熔融塩を発明、米国で弾圧され中止に追い込まれました。古川はこの後、トリウムをこれと結びつけ特化したトリウム熔融塩原子炉^{（F U J}

I (不二、富士) ♪ を発明しました。中国の上海研究所がこれを採用、フクシマの年に上海に実験炉を建設、再来年の2020年には臨界(核分裂の開始)に達します。2030年には公共送電開始が確実視されています。その所長は招待により二度来日しており、最近では6月に国会内でのトリウム熔融塩炉のセミナーで講演しました。米からも二社が参加した国際セミナーであります。

今回の貴著に「戦後最大の平和運動は60年安保闘争」とする見方に「賛同しない」とありますが、私もおおむね賛成です。吉田さんには1958年6月の日共本部での「衝突」事件後に『中央公論』に書いた「学生運動動に忠告する」という文章があり、ブンドに向かう流れを批判していますが、最近読み直してこの機微を伝えるものと感じました。

加戸靖史の「米寿記念」の文章のタイトルは「核の平和利用を問い直す」となっていますが、吉田さんの「高木仁三郎や池山重朗ら、平和利用に強く反対した人たちもいたが、基本的に原発反対と核兵器廃絶は別の流れのグループ。だから議論が深まらなかった」という言葉が紹介されています。その後山脇道夫にインタビューしたようで、「安全性が高く、放射性廃棄物を減らせる次世代型原発トリウム熔融塩炉の実現に力を注ぐ」広島出身の山脇が紹介され、「山脇さんの平和利用への信念に揺らぎはない」と記したのでした。

まことに家内との縁で私は非常に早くから古川学を知っていたのですが、それを正しいと全幅的に信頼することになったのは、2011年フクシマ以降でした。執筆にあたり早くからの支持者を検索して大隈由紀子の『核燃料——探査から廃棄物処理まで』(1976)に遭遇しました。ちょうど貴君の『ジャーナリストの現場』が出た頃のこと、フクシマ後には不都合な本となり、「自身もHPからこの本を削除している」と貴君から教えられ、それを拙著に紹介させてもらっています(102頁)。しかし本のうちの古川関係の記述は精確で肯定されるものでした。

古川学の特徴は、原発を目指しながら、出発時からウランとプルトニウムを拒否し、プルトニウムその他を産出しないトリウムを選んだことです。次に米オークリッジ研究所のワインバーグに学んで操作が容易な熔融塩炉を選んだことです。彼においては「原発廃絶と核兵器廃絶」は分裂せず、一体となっていました。彼以外の人々が分裂したのは、原発をウラン・プルトニウム路線でのみ把握していたからです。

トリウム熔融塩炉は、米では、プルトニウムを産出しないので、冷戦派により弾圧されたため陽の目をみませんでした。日本においても同様で、日本の核武装を想定している勢力が現行のウラン原発を押し進めたのであり、トリウム路線を排除したのです。フクシマによって一時は鳴りを潜めました。安倍政権下で息を吹き返しました。これも好著の太田昌克『偽装の被爆国』に述べられています。この国の「原子力ムラ」はまことにしぶとい(同書116頁)ということになります。

しかしながら国際的にはトリウム熔融塩炉派の前途は明るいのです。この派の古典もしくは聖書的なものにワインバーグの『The First Nuclear ERA』がありますが、日本では出版社が関心を示さないのが今に至るも未訳、ところが中国ではすでに1994年に翻訳され

ています。フクシマで弾みがつき、世界の先頭を走っています。米国、カナダのベンチャー企業がその後を追っております。IAEAは2017年にはトリウム熔融塩炉に特化した国際セミナーを開催しました。私も吉田さんに恥をかかせなかったとほっとしている次第です。

以上貴新箸に触発されて思うことを述べさせていただきました。

先に年賀で早大大学史資料センターに『早稲田・1950年・史料と証言』関連の収集資料を、吉田宅から私が収めたことをお知らせしました。それらの整理がついたようでした。今夏、同センターから私宛に挨拶状と資料受入通知書、またその全977点の内訳明細表（A4表裏計一九枚）が送られてきました。そのうちの最初の二つを、報告を兼ねて送付させてもらいます。これにより、だれもがこれらを利用できることになりました。残る問題として、吉田宅の蔵書の処理があります。そろそろ、と思っておりますが、貴君に案があればお知らせください。

ますますのご健筆を祈ります。早大5・8会その他今後ともよろしく。

敬具

二〇一八年八月三一日

長瀬隆

岩垂弘 様